Osaka University Knowledge Archive

Title	『一条摂政御集』論 : 「とよかげ」の部の特質
Author(s)	堤, 和博
Citation	詞林. 1987, 2, p. 14-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67242
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『一条摂政御集』論
――「とよかげ」の部の特質――

堤　和博

①おほくらのしさうくらはしのとよかげ、くちをしきげすなれど、わかかりけるとき、女のもとにいひやりけることどもをかきあつめたるなり。

②おほやけごとさわがしうて、をかしとおもひけることどもありけれど、わすれなどしてのちにみれば、ことにもあらずぞありける。

③いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど、としつきをへて、かへりごとをせざりければ、まけじとおもひていひける

あはれともいふべき人はおもほえでみのいたづらになりぬべきかな〈注1〉

謙徳公藤原伊尹の私家集『一条摂政御集』は、伊尹自作が通説の、世に物語的といわれる冒頭から四十一首目迄の部分（以下「とよかげ」の部と呼ぶ）とその後の補入部分（以下後人補入部と呼ぶ）、それと『拾遺集』からの補入部分からなる。そのうち「とよかげ」の部は、いま引用した冒頭部分を見るだけでも明らかなように、確かに物語的要素が極めて強い。しかしその研究史を振り返ってみると、「とよかげ」の部は一見して物語的であるといえるがために、その物語的であるということの吟味に、かえって精緻が尽くされていないように思う。本稿は「とよかげ」の部を詳しく分析し、従来重要視されていなかった構成上の問題・特質等を明らかにすることを目的とする。

一　「とよかげ」の部の構成

「とよかげ」の部の構成については、従来それほど問題視されてこなかったようだが、実は「とよかげ」の部の四十一首は、八つの歌群に分かれている。「一條摂政御集（第一部）注釈」〈注2〉や、片桐洋一〈注3〉などがこれと同様の考えを示しているが、その意義等については言及していない。しかし私は「とよかげ」の部を読む際、それが八歌群に分かれていることは、その根拠も含めて非常に重要なことだと考える。

片桐洋一〈注4〉は『後撰集』が歌物語的であるということ

の理由を再吟味し、歌物語について、結局「歌物語の文章は、人物の事績を語る物であり、従って、何よりもまず歌をよむ「人物」を提示することが（歌物語の）最大の要件であった」（括弧内引用者）と結論した。

今この卓見について詳しく触れる余裕はないが、歌物語的といわれる「とよかげ」の部にも、片桐説をあてはめることができる。つまり、「とよかげ」の部には男主人公とよかげと幾人かの女主人公が登場し、とよかげは先に引用したように、冒頭で提示される。問題は女主人公の方であるが、これは「とよかげ」の部をよくみてみると、女主人公が交代するごとに、詞書の冒頭部分に、「（これからとよかげが歌をとりかはすのは）……なりける人」というような形で提示されているのがわかる。換言すると、新たな女性が提示されるまでは同一の女性との贈答が並んでいて、それが提示された時点で贈答相手の女性が変わっているとみなくてはならないということになる。そうすると「とよかげ」の部は相手の女性が誰であるかによって、いくつかの歌群に分かれていると考えられ、次頁の表に示したように八歌群からなることがわかる。〈注5〉

歌を取り交わす男女のうち、男が誰かということは序文で提示されて、以下自明のこととなり、女の方は各々の歌群の冒頭で提示される。つまり「とよかげ」の部の一つ一つの歌群は、片桐の「歌をよむ人物を提示する」という歌物語の「最大の要件」を備えていることになる。従って従来のように、「とよかげ」の部の全体の特徴ばかりを云々するのではなく、一つ一つの歌群を、一つの物語として考察する必要があるのであるが、そのことについては次節以下で詳しく述べる。

さて、以上のようなことを踏まえた上で、序文に目を移そう。本稿冒頭に引用しておいたように、一番歌の前には、私に①・②・③と番号を振った三つの文がある。①・②が序文に相当し、とよかげと「とよかげ」の部の紹介をしていることに異論は無かろう。問題は「いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど」という③の一節である。この一節については、『一条摂政御集注釈』（〈注1〉参照。以下、この本を『注釈』と略称する）で、第一歌群にはいる、または以下の女性達全員の「総合的な説明」になっているとのふた通り解釈の可能性を示しているのをはじめ、意見が一定していない。

しかし、今指摘したように、それぞれの歌群は歌を取り交わした女性の提示で始まっているということを考えると、一見両様の解釈が成り立ちそうなこの一節も、第一歌群の女性の提示部分に相当するということが分かる。もしこの一節が「総合的な説明」とすると、他の七歌群に反し、第一歌群にだけ女性の提示がないことになってしまうからだ。従って「とよかげ」の部の序文は、①・②だけで、「いひかはしける」以下の③は第一歌群に含まれると考えるのが妥当である。

以上のようなわけで序文は①・②の二文からなるとはっきりした。ところで二三番歌の後書部分にある「そのをりはいとを

「とよかげ」の部の構成

	歌群名	歌群の冒頭部分（波線部分が女性の提示）	歌番号
A部	第一歌群	いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど	1・2
	第二歌群	みやづかへする人にやありけん、とよかげ、ものいはむとて	3～7
	第三歌群	とよかげ、おほぬのみがどわたりなりげるひとにかよひける	8～11
	第四歌群	とよかげ、またしのびてすみわたりげる人に	12～20
	第五歌群	もののえありて、このおきな、うちわたりなりげる人に、ものいひけり	21～23
B部	第六歌群	おきな、ごしの京わたりなりげる女にものなどいひて	24～30
	第七歌群	とよかげ、ながのみがどわたりなりげるをんなを	31～40
	第八歌群	このおきな、だえでひさしうなりげる人のもとに	41

（注－A部・B部については、次頁参照）

かしとおもひけることどももありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり」という一文は、序文に照応し、忘却を装って「とよかげ」の部の撰集範囲を示しているとは考えられないであろうか。

この二三番歌の後書部分は「一條摂政御集（第一部）注釈」〈注2〉の訳すように「その頃はたいそうおもしろいと思ったことなどもあったけれど、格別のことのなかった人の身の上はみな忘れてしまった」というほどの意味であろうが、この一文が、直前の第五歌群に属するのか、第一～五歌群全体について言っているのかが問題となる。

第五歌群に含まれるとすると、他の歌群にも、同一の女性との贈答歌でありながら、採録されなかった歌は多いであろうに、なぜここでだけこんなことをことわるのか疑問である。木船重昭〈注6〉は、第五歌群において、歌の贈答相手でない「のべ」が女主人公のようになっていて、「のべ」を除外した「うちわたりなりける人」との恋のやり取りが採録されない「言いわけ」に、撰者は序文②を想起しつつ、彼女のことを「ことなることなきひと」と言い、その「ひとのうへはみなわすれにけり」と「忘却をよそおった省筆を施した」のだという。しかし第五歌群の眼目は、第三節で詳しく述べる通り、とよかげ・のべ・うちわたりなりける人の三人の関係の絡みにあるのである。伊尹には、のべを除外して、うちわたりなりける人とだけの関係をこの歌群に組み入れる意図はなかったであろうし、当時の読者もそのようなことは期待せずに、三人の物語としてこの歌群を読んだであろう。従ってこの女性に限って「ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり」と「言いわけ」する理由はまったくないことになり、この一文が第五歌群にだけかかるとは考えられない。第一～五歌群全体に関わるとみるべきである。

そうするとこの一文は、その内容から考えて、序文と照応していて、跋文とでもいうべき一節だと考えられよう。序文①では「とよかげ」の部の撰集範囲が示され、序文②では忘却が装われている。この一文もそれをうけ、「もっと外に話はあるのだが、あとは皆忘れてしまった」と忘却を装って「とよかげ」の部の撰集範囲を示しているとみるのが一番自然である。

ではなぜここに跋文があるのだろう。私はそれは「とよかげ」の部がここで一旦閉じられたためだと考える。つまり「とよかげ」の部は、内田強〈注7〉のいうように、二三番歌をもって、前半部と後半部に分かれているのである。（以下、「とよかげ」の部の前半部をA部、後半部をB部と呼ぶ。前頁の表参照）

私がこのように「とよかげ」の部が、二三番歌をもってA・B二つの部分に分かれていると考える根拠は、不確実ながらもう一つある。それは『一条摂政御集』の孤本益田家旧蔵本〈注8〉の行移りである。この本を見ると、二三番歌の後書部分とそれに続く二四番歌の詞書部分で改行がなされている〈注9〉。ところで、この本では何らかの切れ目や脱落があると思われる所では、ほとんどの場合改行がなされている。それは、後の文

と文脈上つながらないので、何か脱落があると思われる一〇一番歌の詞書部分内〈注10〉と、後人補入部の切れ目〈注11〉があると思われる一一九番歌の後書部分と一二〇番歌の詞書部分の間〈注12〉である。

益田家旧蔵本は孤本であり、書式・形態ともにかなり特異な本でもあるので、これをもって「とよかげ」の部の原書形態を類推するには慎重でなくてはならない。が、このようにことさら改行が成されているところに、切れ目・脱落が認められるということもたんなる偶然とも思えない〈注13〉。「とよかげ」の部のここの部分にもともと切れ目があって、それを益田家旧蔵本が伝えているということも、大いに可能性があることだと思う。

二　「とよかげ」の部の前半部と後半部の異質性（1）

前節では「とよかげ」の部の構成について考察し、その中で、「とよかげ」の部はA部とB部に分かれていることを指摘した。ところで今までの研究史を振り返ると、「とよかげ」の部の全体としての特徴ばかりが言及され、A部とB部に分けて考察されたことはほとんどない。A部とB部の各々の特徴を、本節と次節で考察する。

私同様「とよかげ」の部を二部に分けて考えている内田勉〈注7〉もすでに指摘していることだが、後書がA部には十一箇所あるが、B部では最末尾に一つ見られるだけであるという相違がある。ところでこのことを突き詰めていくと、「とよかげ」の部の全体の特徴のように言われていることの一部に、訂正を加える必要がでてくる。

阿部俊子〈注14〉は後人補入部と「とよかげ」の部を比較し、後者の特徴の一つとして「何か女性とかかはりを持ち歌の贈答などした後、それについての感想めいたことを記してゐる」ことをあげ、その具体例として、二・五・七・二十・二三番歌の後書部分を引いている。しかしこの具体例が二三番歌までに限られていることに注意すべきである。つまりこの特徴はA部だけの特徴であり、B部には該当しないものである。

また、片桐洋一〈注15〉らによって詳説されている「とよかげ」の部が『伊勢物語』からうけた影響についても、登場する女性の名をあかさないとか、男主人公を老人に仮託し、その若い時の恋を回想的に語っているなどという点は「とよかげ」の部の全体を貫く特徴と言えるが、『伊勢物語』の中に有る詞章を意識している文辞や、下敷にしている語句が有るという観点からみるならば、それもまた、A部だけにみられる特徴である。

例えば片桐洋一〈注15〉や山本利達〈注16〉は、二・五・七番歌の後書や二三番歌の後の私のいう跋文を、伊勢物語の文章の影響を受けたものと考えているが、このような特徴を持つ文はB部には一切見られない。

以上のことは、A部とB部にある後書の多寡から導き出され

ることであるが、次に問題を詞書部分にまで拡げてみよう。

『伊勢物語』の影響を受けた文辞があるかどうかについて言えば、詞書部分を見ても、A部にはあるがB部にはない。例えば一番歌の詞書に「いひかはしけるほどの人は、とよかげにことならぬ女なりけれど」というのは、山本利達〈注16〉が「伊勢物語の中では、身分ちがいの恋が多いことを念頭においての言葉である」という通りであろう。また、七番歌の詞書「はは、女にはらへをさへなむせさせける」が、『伊勢物語』六十五段を受けていることは論を要しない。しかしこの様な例もB部の詞書にはみうけられない。

ではA部に比べてB部の詞書の特徴はどのようなものなのだろうか。

B部の詞書をみて、今述べてきたこと以外に気付くこととして、登場人物の心境に言及していないということが挙げられる。A部を見てみると、所謂草子地的な部分で、作者の感想を述べている部分を別にしても、登場人物の心境について言及しているところが、詞書部分・後書部分を含めてかなりある。ここにそれらを列挙しておく。

「まけじとおもひて」（一番歌詞書、男の心境）
「ものいはむとて」（三番歌詞書、男の心境）
「なさけなしとやおもひけん」（三番歌後書、男の心境）
「いかばかりあはれとおもひけん」（五番歌後書、男の心境）
「かたはらいたかりけんかし」（七番歌後書、女の心境）
「まだしかりけりとて」（一六番歌詞書、男の心境）
「心やすくもえものいはぬことをおもひなげくに」（一八番歌詞書、男の心境）
「あしたになほかなしかりければ」（二〇番歌詞書、男の心境）
「さらにいふべき心ちもせず、あはれにいみじとおもひて」（二〇番歌後書、男の心境）

ところが、B部の詞書部分にはこういうものは一切ない。例えば、三一番歌は、伊尹が本院侍従を盗み出すという印象的な事件をもとにしていると思われ、とよかげや相手の女性の心境について言及されていてもよさそうなのだが、実際は「とよかげ、なかのみかどわたりなりけるをんなを、いとしのびてはかなきところにゐてまかりて、かへりてあしたに」とあるだけで二人の心境についてはまったく語られていない。B部の詞書についてはすべてこのことが当てはまる。つまりB部の詞書というのは、歌が詠まれるに至った事情を、時には詳しく、時にはあっさりと記すのみで、A部の詞書にみられたような特徴はみいだせないのである。

三　「とよかげ」の部の前半部と後半部の異質性（2）

以上、表面的にも表れているA部とB部の異質性について考察し、B部よりA部により工夫が凝らされていることを明らか

にした。しかしA部に凝らされた工夫は、実はこれらだけではない。以下、A部のそれぞれの歌群を詳しくみてゆき、伊尹の意図したものを探ってみたい。

第一歌群は序章的なものである。話自体は長らく返事をくれなかった女からやっと返歌をかち得たということであるが、注目すべき点は二つある。その第一は、「としつきをへて、かへりごともせざりければ、まけじとおもひていひける」という一番歌の詞書と、それに対応し、明らかに『伊勢物語』初段を意識している

「はやうの人はかうやうにぞあるべき」云々という二番歌の詞書である。これらを合わせて考えるならば、とよかげの恋に対する情熱は相当にあついものであり、それは今の若者の比ではないということを、この歌群では強調せんとしているのだと思われる。

注目すべき点の第二は、一番に「あはれとも」の歌をもってきていることである。この歌は後に『拾遺抄』『時代不同歌合』『百人一首』『八代集秀逸』等にも採られたほどの歌である。おそらく伊尹も相当の自信をもっていたであろうから、これによってやっと返事を得られたという、この秀歌の手柄をここで強調せんとしているのだろう。

即ちこの序章的歌群の意図は、とよかげのことを、業平の様に歌も上手で、女に対する情熱ももっている男だと紹介することにあるのだとみてとれる。

第二歌群は一応三～五番歌迄の前段と、六・七番歌の後段に分けて考えられる。前段は長い時間をかけてやっと女と逢えたという話である。三番歌はこの女と契る機会がありながら雨に崇られて果たせなかったという事件。『注釈』では女が雨に濡れるのを嫌ってか、雨の中を男はやって来るまいと思ってか、自室に下らなかったのであろうと推測している。四・五番歌は新枕の後朝の贈答とみて間違い無かろう。歌の内容や「としをへて、上ずめきける人の」云々という五番歌の後書がそう思わせるし、「いかなるをりにかありけむ」という四番歌の詞書は『蜻蛉日記』で兼家と道綱母が初めて枕をかわした翌朝が「まめぶみかよひ〳〵ていかなるあしたにかありけむ」（岩波大系本一一二頁）と表現されていることから推しても、一層このやり取りが新枕の後朝のものであろうと思われるのである。

さて、ここで注目すべきは、「としをへて、上ずめきける人のかういへりけるに、いかばかりあはれとおもひけん」という五番歌の後書にある一文である。とよかげとこの女は初めて契りを結ぶまで、どんな仲であったかは、三番歌より想像するしか無かったのが、この一文によって、女は「上ずめ」いていてとよかげを拒み続けていたことがわかる。そうすると、三番歌で描かれた事件では、とよかげはまれまれにおとずれたこの女との逢瀬の機会を逸したことになり、とよかげの悲しみは一層深まろう。また、こんな悲しい事件を経た上で女と逢えたということになるのだから、四・五番歌での喜びも深まることにな

る。このように前段は、とよかげの悲しみと喜びが相乗的に高まるように構成されている。

後段は、二人で口裏を合わせて女の親を騙してまで関係を続けようとする話である。話自体のおもしろみに加えて、『伊勢物語』六十五段をふまえた「はらへ」がでてきたり（七番歌詞書）、「心やましなにとしもへたまへ」（七番歌後書）と歌以外の所にまで掛詞がでてきたりするおもしろみもある。しかしこの話のおもしろみは、前段をも合わせて読めばこれらだけにはとどまらない。

まず男の側に焦点を当ててみる。とよかげは長年拒まれ続け、雨にまで祟られて逢瀬を逸した女の心をやっとつかんだものの、今度は女の親の邪魔がはいる。勿論とよかげはこれで諦めたりしないで、女の親を騙してまで二人の仲を維持しようとする。そんなとよかげの一途さは、前段後段相俟って一層強く感じられる。次に女の側に焦点を当ててみる。前段ではあんなに男を拒んでいたのに、一旦逢ってしまうと、後段では、「かたはらいた」く思いながら（七番歌後書）も、男の嘘に口裏を合わせて親を騙してしまう。いみじくも五番歌の後書で言及された女の「らうた」さは前段後段相俟って一層強く感じられるのである。

結局第二歌群全体を通じては、男の一途さや女の「らうた」さ、はたまた「人のおやのあはれ」さ（七番歌後書）などをちりばめながら、さまざまな障害を乗り越えて愛を獲得・維持していくことをテーマにした、緊密な構成をとった歌物語になっていると言えよう。

ところで、この歌群は、七番歌が『後撰集』巻二・恋三・七三二〈注17〉に「小野好古朝臣女」の歌として採られているので、好古女との贈答歌をもとにしてつくられているとみて間違いなかろう。そうすると、後人補入部には、伊尹と好古女の関係はその後も長く続き、伊尹は好古女とも、また好古ともかなり親しかったことを窺わせる数首の歌がある〈注18〉のに、なぜこれら後人補入部の歌が「とよかげ」の部に入れられなかったのかということが問題になる。

守屋省吾〈注19〉は「とよかげ」の部に採録されたのは、伊尹が二十四・五歳頃までのことであり、後人補入部にある好古関係の歌はそれよりも後のものだと考え、「とよかげ」の部の執筆期を、彼の二十四・五歳の頃としている。

しかし私は、「とよかげ」の部の執筆期は、伊尹晩年とみる通説〈注20〉でよいと思う。ではどうして好古女関係の歌のうち五首だけが「とよかげ」の部に採られ、他は入れられなかったのかというと、それは第二歌群のテーマのためである。この歌群のテーマは先ほど述べた通り、二人が色々な障害を乗り越えながら恋を続けることにあり、障害の中には女の親も含まれる。それなのに男が女の所でゆっくりしている場面や、女の親と親しくしている場面をもちこめば、このテーマは台なしになってしまう。たとえ同一の女性とのやり取りであっても、ある

一定のテーマから外れる歌は、「とよかげ」の部には入れられないのである。

次に第三歌群に論を進める。この歌群には後書がなく、詞書の性格もB部のそれと同じくするが、それなりのテーマははっきりとみてとれる。それは今までとは一転、女に対して冷たい態度を取るとよかげである。この歌群は四首の歌からなるが、そのうち三首までが女の歌である。その話の展開を追うと、「をとこの、いへのまへをつねにわたりて、ものもいはざりければ」という『蜻蛉日記』の一節〈注21〉が髣髴とするような状況で詠まれた女の歌（八番歌）。それに続くのは、それでは訪れようという男の歌（九番歌）と、それに対する女の喜びの歌（十番歌）である。十番歌の詞書の「たちかへり」に女の喜びがよくあらわれている。しかしこのように一旦女を喜ばしておきながら、結局とよかげは来なかった。最後は女のわが身の老いを託つ歌で終っていて、男の返歌もない。

この歌群は先述のとおり、詞書の性格をB部と同じくし、また量も少ないのであるが、とよかげとある女との愛の終末部を、とよかげの冷たさと女の惨めさに焦点を当てて、見事に描き出しているといえる。

またここにこういう歌群をもってきた意図は、この前後で女に情熱を燃やすとよかげの姿が描かれているので、物語の内容に幅をもたせようということでもあろうか。

次の第四歌群は全体的にみれば、冒頭の「しのびてすみわたりける」という詞書がいみじくも示している通り、忍びの恋とその破局の物語であるが、この歌群は構成上はっきりと二段に分かれる。

前段は十二から十七番歌。忍びながらも愛し続ける二人が、どんな心境にあるかがそれぞれよくでている。男の心を疑ってみる女（一三番歌）や、女の態度がつれないと訴えてみる男（一四番歌）。しかし結局二人は互いの愛を確かめ合っている（一六・七番歌）。また私は一六番歌の詞書に「まだよふかきにいでて、まだしかりけりとて、かへりいりて」とあるのは、この恋を秘めておくために、暗いうちに帰らなくてはというとよかげの焦りと、それでも少しでも長い間女といっしょにいたいというとよかげの女に対する愛着とを如実に表していると思う。

一八番歌以下は、一八番歌の詞書の冒頭に「このおきな、かくいひつつ、心やすくもえものいはぬことをおもひなげくに」とあって、今までの部分がまとめられ、次の場面への転換がはかられているので、一七番歌以前と区別して後段を構成していると考えられる。

この、後段の話は、二人の愛の破局の物語である。この部分は、ほとんど贅言を要しないと思うほど緊密な構成を取っている。それまでなぜか忍びながら愛し合っていた二人に、女の夫という障害があったことがわかる（一八番歌詞書「またあらはれたる人もあれば、それにもつつむなるべし」）。二人はそれでも女の夫に遠慮しつつ贈答を続けるが、ついに第三者の忠告

（二〇番歌詞書「きく人のいみじういひければ」）によってその愛は終局を向かえさせられる。このように急速に愛の破局を向かえた二人のうち、女は「このことやみなむなどちぎりて、あしたになほかなしかりければ」と、とよかげに歌を贈る。またとよかげはその歌に返歌もできずに「あはれにいみじとおもひて、一日二日さしこもりてな」く。二人の悲しみが頂点を極めたところでこの物語は終わっている。

このように後段は二人の悲しみが頂点に上りつめた所で終わるのであるが、前段から続けて読むならば、二人の悲しみの度合は増す。前段では先述の通り、忍ばなくてはならない二人の心境の機微を写し、最後には二人愛の確認の歌が置かれる。こうして二人が愛し合っていることをはっきりと示しておいて、後段では一転、二人の仲は第三者達によって、いわば引き裂かれるわけであるから、前段と後段を相通じて、二人のより悲しい愛の破局の物語が構成されているといえる。

A部最後の第五歌群には、とよかげ・うちわたりなりける人（以下「女」という）・のべの三人が登場する。二一・二番歌は、のべの手違いからであろうか、女と逢えなかった時にのべと契ってしまったとよかげの歌である。この話は、『注釈』の指摘するように、権門の伊尹が女童と契るという衝撃的な事件をもとにしているのであろうが、この二首を見ると、とよかげののべと契った感激よりも、女と逢えなかった悲しみが歌われているようである。それはどういうことかと言うと、女童と契ったということだけでも、あるいは、何らかの理由で女と逢えなかったということだけでも物語を成し得るところを、この段ではこれらの単独の要素だけではなく、この両方の話を旨く絡めて、一層面白い物語にしているのである。つまりこの歌群の眼目は、とよかげがのべと契ったということだけにあるのでもなければ、とよかげが女と逢えなかった悲しみだけにあるのでもない。この両要素の絡み合いのうちにあるのだと考えられる。

さて、問題は「白露はんすびやするとはなすすきとふべきのべも見えぬあきかな」という二三番歌である。この歌は後書に「これにてぞなくなりにけりとはしりける」とあるので、女の歌としかとりようがない。ところがこの歌は『新勅撰集』巻一八・雑三・一二二九に「謙徳公」の歌として取られている。『新勅撰集』は益田家旧蔵本以外の伊尹集を撰歌材料にしたと思われ〈注22〉、この歌を伊尹の歌とするのは、『新勅撰集』の間違いだとは断じ得ない。その内容を見ると、女がのべの死を知らせてきた歌とみるよりも、男の独詠と見る方がふさわしく思われる。むしろ「とよかげ」の部が虚構を施したと考えるべきであろう。

ではこの虚構の意図は何なのか。この歌群の眼目はとよかげ・のべ・女の三人の絡みにある。なのにここにとよかげの独詠歌をもってきてしまうと、ここでの女の役割がなくなってしまう。しかし女がのべの死を知らせてきた歌とするならば別である。つまりこの歌の意味は「去年の秋、貴方は私を差し置いて

のべと契りを結びましたが、花薄の上に白露が結ぶように、また契りを結んでくれるかと貫方が尋ねるでありましょうのべも、もういなくなった今年の秋ですよ。」ということになり、この歌は、のべを失った悲しみと、これからとよかげは自分だけに愛情を注いでくれるであろうという期待感が、微妙に絡み合った女の心境を詠んだ歌ということになり、三人の関係の絡みがでてくるのである。

このように第五歌群は、とよかげ・のべ・女という三人の関係の絡みを眼目にした歌群であり、中で一首、伊尹の歌を女の歌にするという虚構が施されている。

以上、A部の各歌群を見てきたわけであるが、その結果A部の各歌群は色々な工夫のもとで、それぞれあるテーマに貫かれた緊密な構成をとっていることがわかった。ではB部の歌群はどうであろうか。それを次に述べていくのであるが、一首しかない第八歌群については、次節で論じる機会があるので、ここでは第六・七歌群についてみていく。

まず第六歌群であるが三つの場面からできている。第一の場面（二四～六番歌）は女から初めて返歌を得る話、第二の場面（二七・八番歌）は「をとこまかりそめてまたえまからで」という状況での贈答、第三の場面（二九・三〇番歌）は男が「たちながらまかりかへ」ったという状況のもとでの贈答である。ところでこの三つの場面にどのような有機的なつながりがあるのであろうか。二人の仲は進歩しているようでもあるし退歩しているようでもある。A部の第二・四歌群のように、とよかげにとって相手の女性がどんな女性（例えば忍びに忍んで愛さなくてはならない女性だとか）なのか明らかにされているわけではない。かといって第三・五歌群のように、何らかの一定の視点（例えば男が女に冷たくする愛の終局部）をもって三つの場面が構成されているわけでもない。つまりこの第六歌群は詞書にこれといった工夫もなく、ある女性とのその時時の贈答歌を並べているだけで、緊密な構成をとっているとはいえない。

次に第六歌群である。これは『注釈』のいう通り、本院侍従との贈答歌をもとにしているとみて間違いなかろう。この歌群は伊尹が本院侍従を盗みだすという衝撃的な事件を種にした話を冒頭におくが、以下、とよかげが「この女のもとにきぬをわすれて」かわされた贈答歌（三五・六番歌）や、とよかげが「山と（大和）よりかへりて」かわされた贈答歌（三八・九番歌）が並ぶだけで、一貫したテーマは見えにくい。このなかで女の歌を見ると、三二番歌に「うちとけぬべきこちこそすれ」という句があり、以下とよかげに一応逆らっているようにみせはするものの、彼に愛着を示している歌が多いので、とよかげが女を盗み出したことと、女がとよかげに愛着を示しだしたことに何か関連性をもたせようとしていることは予想できる。しかしこれと言って断言すべきテーマは見いだせず、この歌群も、衝撃的な事件で始まってはいるが、以下はその時時の贈答を並

べるだけで、緊密な構成をとっているとは言いがたい。

このようにB部の各歌群には、A部でみられたような工夫もテーマも見いだせなかった。それで、A部とB部の異質性について、第三・四節で、述べきたったところをここでまとめるならば、

Ⅰ　A部には詞書部分の他に後書部分が数多くあるが、B部には後書は一つしかない。

Ⅱ　A部の後書部分は、時には『伊勢物語』を意識しつつ、作者の感想が述べられることがある。

Ⅲ　A部では詞書でも後書でも登場人物の心境について触れられることがある。

Ⅳ　Ⅱ・Ⅲで述べたような特徴はB部にはみられず、B部の詞書は歌が詠まれるに至った事情を淡々と述べるだけである。

という四つに加え、

Ⅴ　A部の各歌群はあるテーマに貫かれた緊密な構成をとっているが、B部の歌群には一定のテーマも見いだせず、緊密な構成もとっていない。

という重大な相違があるのであった。

四　後半部未定稿説

先の二節において、「とよかげ」の部の各歌群はA部とB部で性質を異にすることを論じた。ここではその原因について考えてみたい。

A部の各歌群があるテーマに貫かれて緊密な構成をとっているのは、無意識のうちに、あのようなものが自然にできるとは到底考えられないので、伊尹の作意によるものであるとみて異論は無かろう。問題は、B部の各歌群では工夫も凝らされず、テーマもはっきりしないということが、伊尹の意図したことかどうかということである。

私は、それは伊尹の意図したことではないと考える。今まではA部とB部の異質性を主に強調してきたが、勿論両者を貫く特徴もある。主人公をとよかげに仮託していることや、贈答相手の女性の名を明かさないこと、また、本稿第一節で指摘した、歌群の最初に女性を紹介し、その女性との贈答歌をもとにして一つの歌群を形成していることなどがそれである。そうすると伊尹はB部でもA部と同様な物語歌群をなそうとしたと考えるのが自然であろう。A部であれほど工夫を凝らした緊密な物語歌群をなした伊尹が、果してB部で男女の主人公の書き方や、歌群の形成法は継承しながら、改めて詞書にも工夫を凝らさず、緊密な構成もとっていない物語歌群をなそうとするであろうか。私は、伊尹はB部でもA部と同様な物語歌群をなそうとしたが、何らかの理由でそこまでには至らなかった、つまりB部は未定稿であると考える。

次に本院侍従との贈答歌をもとにした第七歌群を見直すことにより、B部未定稿説について考察する。ここにこの歌群を取り上げるのは、後人補入部や『拾遺集』に伊尹と本院侍従との

贈答歌が収められていて、「とよかげ」の部にそれらを合わせて考えれば、この歌群でもともと意図されていたテーマがみえてくると思えたからである。

さて後人補入部の本院侍従関係の歌〈注23〉には、その詠歌時期が特定できないなどの問題点はあるが、いくつかの事実はそこから導き出すことができる。

まず第一に、「とよかげ」の部でとよかげが女を盗み出したことからも窺えるが、二人の仲はあまりおおっぴらにできないことがわかる。それは四三番歌からも知れるし、後人補入部の第一次成立段階では女性のことを「たれとしらず」（九八番歌詞書）と言ったり、単に「じじうのきみへ」（一一三番歌詞書）と言ったりしていて、第二次成立段階で初めて「本院にこそ」（一〇〇番歌詞書）・「本院のにや」（一一三番歌詞書）と名が明かされていることからも測られる〈注24〉。また、一一三番歌に「すこしだにいふはいふにもあらねばや」とあるのは伊尹が本院侍従に十分に愛の言葉も吐露できない立場にあることを示していよう。

第一の点と関わることだが第二に、本院侍従は伊尹に対して消極的であろうとしていることが目だつ。九八番歌から一〇〇番歌には如実にそれが表れているし、一一七・八番歌からは、伊尹と本院侍従が逢いそめるまでにかなりの間本院侍従は伊尹の言い寄りを拒んでいたことが分かる。それと、かなり後のことになるが、『拾遺集』巻一九・雑恋・一二六三番に、

一条摂政下らふに侍りける時、承香殿女御〈注25〉に侍りける女にしのびて物いひ侍りけるに、さらになとひそといひて侍りければ、ちぎりし事ありしかばなどいひつかはしたりければ　本院侍従

それならぬ事もありしをわすれねといひしばかりをみみにとめけん

とあるのをみても、本院侍従は伊尹との仲をないものにしようとしていることがわかる。

そして、これらのことには当然、『本院侍従集』に見られるように、本院侍従が伊尹の弟兼通とも恋愛関係にあったことが関係していよう。

このような事をふまえて第七歌群を見直してみると、そのテーマが予測できないだろうか。第七歌群は第三節でも触れたように、最初にとよかげが女を盗み出す話があり、以下に女がとよかげに靡いていることがみえる。伊尹にすれば、おのが生涯を振り返ってみて、忘れえぬ女性の一人であったであろう本院侍従について、彼女が珍しく自分に心を寄せていてくれた時期の事と、そのきっかけとなった事件をテーマにして、一つの歌群をなそうとしたのではなかろうか。そしてこの事があまりにも印象的であったので、長い時間を経て初めて本院侍従と逢えた時のことなどは、この歌群から捨象してしまったのであろう。

こう考えると第七歌群のテーマもみえてくる。しかしこれは、「とよかげ」の部以外にある本院侍従関係の歌や、『本院侍従

集』をも考慮にいれて導き出される一つの推論結果である。ところがこの歌群だけをみるならば、そこからはテーマなど読み取れず、むしろそれは散漫な印象を受けるものになっていることは前述の通りである。果してこれで伊尹は満足したであろうか。ここではすでにあるテーマに沿って歌が絞り込まれているのだから、A部のように詞書等に何らかの工夫を凝らしたならば、相当緊密な感じを与える歌群になっていたに違いない。そうしてA部ですでに、そうすることが可能だと証明されている伊尹が、緊密な構成をとろうとせず、現存のような第七歌群で満足していたとは到底考えられない。私がB部未定稿説を採る所以である。

ところで、ここでも第三節で取り上げた守屋省吾の「とよかげ」の部成立期に関する意見に対して、「とよかげ」の部の成立期は伊尹晩年であり、第七歌群以外の本院侍従の歌が「とよかげ」の部に取り上げられなかったのは、第七歌群のテーマからはずれていたからであると反論することができる。

さて、以上のような理由で、私はB部は未定稿だと考えるのだが、ここに一つ今まで触れてこなかった歌群がある。それは第八歌群（四一番歌）である。

これは色々な点で注目すべきことをもつ。まず、この歌群は便宜上歌群と呼んできたが、「とよかげ」の部にあって唯一一首の歌だけで成り立っていること。それと、B部にあってこの歌だけが後書を持つこと。また、四一番歌だけの問題ではないが、益田家旧蔵本〈注8〉では、この歌の後の半帖分ほどが無造作に破り取られており、益田勝実〈注26〉はこの部分に更に「とよかげ」の部が続いていたと想定している。果してそれが妥当かどうかも問題となる。これらの問題も、私はB部未定稿説で解決できると考える。

四一番歌は

このおきな、たえてひさしうなりにける人のもとに
ながきよにつきぬなげきのたえざらばなににいのちをかけてわすれん
おほやけごといそがしきころにて、これがかへしをえせずこそなりにけれ

とあるが、後書の解釈の仕方が二通りに分かれている。一つは、四一番歌は詞書から男の歌だとわかるから、後書を素直に読み、忙しいのは女ととる立場。「一條摂政御集（第一部）注釈」〈注2〉はこの解釈をとる。いま一つは、阿部俊子〈注14〉や『注釈』のように、四一番歌の後に欠文を想定してまでも、忙しいのは男であると考える立場。それは阿部自身が「又最後の（中略）後書は、この文の表現からみると冒頭の文と呼応して」というように、冒頭序文の「おほやけごとさわがしうて」という言葉との照応を考えるからである。この序文の一節（本稿冒頭の引用文参照）は男が忙しいと言っている〈注27〉わけだが、序文にこのような言葉があり、「とよかげ」の部の最末尾に又同じような言葉があれば、それは序文に対応していて、男が忙

しいと言っているのだと考えたくなるのもよくわかる。ところで、これらに対し私は、この二通りの解釈を折衷し、この後書は序文を意識しているが、脱落など想定する必要はなく、忙しいのは女と解ってよいとする立場に立つのであるが、それはB部末定稿説を根拠としてのことである。

B部は幾度も述べたとおり、未定稿である。何らかの理由により、伊尹はここで筆を置かなくてはならなくなったのであろう。それで「とよかげ」の部に結末をつける必要が生じ、伊尹は女から返歌をもらえなかった四一番歌を最後にもってきて、序文の「おほやけごとさはがしうて」を意識した跋文のような後書をつけ、「とよかげ」の部を閉じようとしたのであろう。後半部の中でこの歌だけが後書を持つことになったのはこれで分かる。しかし後半部は所詮未定稿である。詞書に工夫を凝らしたり、後書をつけたりする余裕がなかったように、ここでも序文ときっちりと照応した跋文を作る余裕はなかったようだ。だからこの後書は、跋文とするならば、四一番歌にしか関わらない、序文で忙しいとされていたのは男であるのに今度は女が忙しいということになっているなど、中途半端なものになっている。

このように考えたならば、この歌群だけが一首の歌でできていることもB部で唯一後書を持つことも理解できる。それはいわば、「とよかげ」の部の結末を無理につけるためであったのだ。

そうすると益田家旧蔵本の「とよかげ」の部の後にある、半帖分の欠損部分に猶「とよかげ」の部が続いていたと考える余地はなくなる。これは鈴木棠三〈注28〉の言うように、元白紙で汚れかなにかのために切り取られたとみてよかろう。

また、私同様「とよかげ」の部を二部に分けて考えている内田強〈注7〉は、二三番歌の後書部分と四一番歌の後書部分を比較し、二三番歌のそれを「とよかげ」の部の終末部としてふさわしいものと認め、四一番歌のそれは、伊尹のなした終末部としては稚拙過ぎると言う。この考えには私も賛成であるが、四一番歌の後書が稚拙過ぎるということの原因を内田は説明していない。しかしこの事についても、私のB部末定稿説で説明がつくであろう。

注

〈1〉『一条摂政御集』の引用は、平安文学輪読会編『一条摂政御集注釈』（昭和42年、塙書房）の本文による。以下、同じ。

〈2〉王朝文学研究部会（桑原博史指導）編（『王朝文学』13号、昭和41年11月）。なお、「第一部」とは私の言う「とよかげ」の部のこと。

〈3〉「一條摂政御集について」（『国語・国文』34巻12号、昭和40年12月）

〈4〉「後撰集の物語性－付歌物語の本質」（『国語と国文学』44巻10号、昭和42年10月）。後、『伊勢物語の研究【研究篇】』（昭和43年、明治書院）で再論。

〈5〉「とよかげ」の部は、五人の女性との贈答歌で構成されているという難波喜造（「豊蔭の主題」『日本文学』10巻11号、昭和36年11月）には従えない。

〈6〉「『一条摂政御集』解釈ところどころ」（『中京大学文学部紀要』16巻2号、昭和56年11月）

〈7〉「「一条摂政御集」前半部の物語性」（二松学舎大学雨海ゼミ『平安文学探究』、昭和54年度）。なお、「前半部」とは私の言う「とよかげ」の部の全体を指す。

〈8〉昭和12年松かけ会発行の複製本の昭和33年再販本による。

〈9〉益田家旧蔵本の当該部分を、その字配りに従って翻字する。（印刷の都合上厳密ではない。以下、同じ）

いとをかしとおもひけることゝ
もゝありけれとことなることな
きひとのうへはみな　わすれ
にけり
おきなにし　の京わたりなり

〈10〉益田家旧蔵本の当該部分を、その字配りに従って翻字する。

たれにかひとに
はやうのことなるへし　きたのかたと
ゑし　たまて　さらにこしとち　か
ことし　てものともはらひな　と
してふつかはかりありて

〈11〉「たれにかひとに」は文脈上後には続かないので、この直後に何か脱落していると考えられる。

片桐洋一（〈注3〉論文と『注釈』解題）と阿部俊子（『歌物語とその周辺』昭和44年、風間書房）は、後人補入部の重出歌の位置関係等から、後人補入部は一一九番歌以前と一二〇歌以後の二段階に分かれて成立したと考えている。

〈12〉益田家旧蔵本の当該部分を、その字配りに従って翻字する。

このおとゝはいみしきいろこ
のみにてよろつの人のこさ
し・とたはれありきたまへ
とのきて　あくひとなくあ
はれにのみおもひきこゆるか
たれそ
ひさしくえおはせてむかへひ
に

〈13〉七番歌の後書部分にも改行がなされている。益田家旧蔵本の当該部分を、その字配りに従って翻字する。

心やまし・なにとし・もへたまへと
かゝす
女かたはらいたかりけんかし
人のおやのあはれなることよ
とよかけおほゐのみかとわたりな

この部分は文脈上の破綻もないのに、なぜこのような字配りになっているのかわからない。

〈14〉前掲書〈注11〉

〈15〉〈注3〉論文と『注釈』解題

〈16〉「大蔵史生倉橋豊蔭について」（『国語国文』34巻12号、昭和40年12月）

〈17〉勅撰集の引用と歌番号は、『新編国歌大観』による。以下、同じ。

〈18〉四六～四八番・六六番・一〇七番・一七〇番歌。

〈19〉「『一条摂政御集』考ー主として第一部とよかげの成立期についてー」（立教大学『日本文学』29号、昭和47年十二月）。後、『蜻蛉日記形成論』（昭和50年、笠間書院）に「『一条摂政御集』「とよかげ」の部の形成要因」として所収。

〈20〉丸岡誠一「一条摂政御集成立私見」（『文学論藻』11号、昭和33年5月に詳しい。

〈21〉『蜻蛉日記』上巻・天暦十年（岩波大系本一二二頁）かくてたえたるほど、わが家は、内裏よりまいりまかづるみちにしもあれば、夜中あか月とうちしはぶきて、うちわたるも、きかじとおもへども、うちとけたるいもねられず、夜長うしてねぶることなければ、さななりとみきく心ちは、なににかは似たる。

〈22〉益田家旧蔵本と『新勅撰集』にある歌の語句の異同から、片桐洋一（〈注3〉論文と『注釈』解題）は定家が益田家旧蔵本以外の伊尹集を保持していたと予想し、阿部俊子（〈注11〉参照）は益田家旧蔵本と「同類でありながら多少の字面の異同と共にちがった形をもってゐた伝本があったかもしれない。」と言っている。又片桐は為家に始まる二条家流の歌集にのみ、益田家旧蔵本にない歌が伊尹の歌としてとられているので、益田家旧蔵本以外の伊尹集が二条家に伝わっていたとも予想する。

〈23〉ほぼ確実に伊尹と本院侍従のやりとりと認定できるのは、四二～四四番、九八～一〇〇番、一一三～一一八番歌である。

〈24〉片桐洋一（〈注3〉論文と『注釈』解題）は「やまとのめのとと世にいひける」（五七番歌詞書）や「をんな、のちのよのたかまつのないしとぞ」（一二一番歌詞書）等の記述から、後人補入部に第一次編纂者と第二次編纂者の存在を認めている。「たれとしらず」・「じじうのきみへ」というように相手の名をあかさな

いのは第一次編纂者によるもので、それに対して「本院」という呼び名をあかすのは第二次編纂者によるものと考えられる。

〈25〉 承香殿女御とは徽子。「とよかげ」の部や『本院侍従集』に描かれた事件がおこったのは本院侍従が安子のもとに仕えていた頃で、彼女が徽子に仕えるのはかなり後のことである。

〈26〉 「豊蔭の作者」（『日本文学史研究』20号、昭和27年10月）

〈27〉 「一條摂政御集（第一部）注釈」（〈注2〉参照）は、「編集者である私は、なにぶん公務多忙のため」と訳す。

〈28〉 「一條摂政御集の研究」（『文学』3巻6号、昭和10年9月）

（大阪大学大学院博士前期課程）